

MOMO 企画の「ファンタジーと現実の関係を考える」として以下の文章を掲載します。
ご意見を頂ければ幸いです。7つ目の考察です。

MOMO 企画の「ファンタジーと現実の関係を考える」 7

自閉症での「想像力の欠如」を通して「想像力」を考える

発達クリニックぱすてる 東條恵

2021年5月1日

はじめに

2021年4月20日付の院長日記では、想像力を研究してきた方の著書(構想力と創造力 半田智久 ひつじ書房 2013年)から、文章を引用させてもらい、自分なりに学んだことの整理を試みました。「想像力」に関しては、まだまだおぼろげなイメージしか、私にはできていないことに気が付きます。そして「ファンタジーと現実」を考えるとときには、「想像力」という言葉の抜きには語れないことは理解されます。「ファンタジー」は想像の世界ですから。今回はこのファンタジーの基礎である「想像力」とは何かを、私なりに考えてみます。

以前自閉症で問題になる事として、①対人関係の問題、③コミュニケーションの問題の二つに加え、3つ目に③想像力の欠如が問題として挙げられていました。「自閉症における想像力の欠如」といった時の「想像力」とは、一般的に使っている「想像力」とは中身が違うかどうか気になるところでしょう。

結論としては、一般的に使う「想像力」は、様々な脳システムの総合的な力の発露であり、「自閉症における想像力の欠如」と使う時には、想像力をもたらしている各種要素の力の欠如＝不調を意味し、人によってその不調の分野と程度は様々だろうとまとめられると思います。

今回は、「自閉スペクトラム症における想像力の欠如とは何を指すのか？」を念頭に置きながら、「『想像力』とは何か」について考えてきたこと、学んできたことを書きつらねてみます。自閉症における問題は、多数派が常時している脳活動の内容を改めて書き出し、それらの不調を述べていると、改めて気が付かされます。

(最近自閉症を語る場合に、「想像力の欠如」という言葉はあまり使われなくなってきました。これに代わり、「こだわり」を問題にする流れとなったと認識しています。そして最近では自閉症における「感覚過敏の問題」が大きな問題として取り上げられつつあります。これらの詳細は省きますが、診断(基準)の中身の変遷の話です。興味ある方は、これまでの診断基準の変遷を参照ください)。

想像力とは一様なまとめ方 (A B C D)

A 脳システム論(by 東條)での想像力

まずは、脳システム論に関係づけて想像力を説明してみます。「脳システム論」とは、「人はどう生きているか」の大枠であり、その考え方を「様々な問題が出ている時に解決・改善方向を考える上での基礎としましょう」との提案/視点です。(自著「脳システム論で発達凸凹・はったつ障がい・人の理解 -そして個別支援計画づくりへ」 考古堂 2020年)

- 1、 不安感知システム:不安を感知し、生き延びようとする方向を探る力。
- 2、 愛着形成システム:不安を払しょくさせるシステムと推測します。自分の愛着対象を確認し自分を安心させる力(その人がそばにいないでも、心の中にその人への安定した感覚を持ちつづける力があれば、安心を担保することが可能です)。
- 3、 心の理論(他者):他者や外の世界に対して心の理論を使い、周囲の人の心を読み、自分の周囲を安心出来るものとして確認しようとする力。
- 4、 心の理論(自己):自己の心への心の理論、いわゆる内省(自分の考えをまとめたり、自己の言動を反省したりし、次に生かすとか・・・)をして、自分がどうあるべきだったか、今後どうすべきかなどを想像し、心の安定化をはかる力。
- 5、 ADHD関連システム=抗ADHD機能:実行機能システム、報酬系システム、時間制御システムといわれる内容。目的・目標に向けて記憶や物事を組み立てて問題解決策を探ろうとしたり、報酬を期待できる場合に、その方向で行動しようとする力。
- 6、 現実と異なる世界を自己のために作り出す:記憶を利用して、想像の産物としての「物質的世界や人間世界」を精神世界の中に作ろうとする力。空想とか。小説、漫画、アニメ、映画などもこの助けとなる。個々人の空想やファンタジーといわれるものを、自分のために頭の中で作り出す力。
- 7、 現実とファンタジーを区別して生きる:ファンタジーの世界と現実を区別し、上手く使いわけようとする力。
- 8、 安定して生きるために:自分の周囲の情報を取得し、集団の中で自分を位置付け、自分の振る舞い方を決め、自分を安心・安定させようとする力。子育て世代であれば、子どもを安心して養育できる条件整備に心をくだく。また人間は他者とどう折り合い、どう生きるべきかを考えようとする力。
- 9、 記憶容量を使い、脳システムを使い、過去・現在・未来を獲得しようとする力:私たちは自分の過去・現在・未来だけでなく、人類のこと、そして宇宙の果てまで想像をしようとする。

以下に、少し説明を加えます。

- ・不安を感じる事、不安の材料を感知しても、それが自分の脅威にならないと推測したり、または害になると推測することを、私たちの脳はしています。これは、感覚的世界のみではなく、論理的な世界=創造力を使っています。爬虫類的な防衛本能だけで動いていないのが人間でしょう。
- ・心の中の母的存在(具体的には多くの場合、母でしょう)を思い描くことで、自分の不安を払しょくする作業が、おそらくコンスタントに脳内で起こっていることでしょう。これを支えに人は一生生き

ていくと思われませんが、この精神機能は、まさに想像力の一部をなしているはずと思います。

- 一般に想像力とは前頭葉関連機能としての、「心の理論」と「抗 ADHD 機能(これがあれば ADHD にならない機能)」が上げられるでしょう。しかし、ここでいう想像力は、その他の面も含まれると考えられ、それらを使って人は生き抜こうとしていると思えます。想像力がなければ、不安のシステムだけを使った動物的な判断世界で、この人生を生きていかねばならなくなるでしょう。爬虫類や両生類はそうなのでしょう。私達人間は、それより上位の脳システムを使って、より良く生きるために想像世界を生み出しているのでしょう。
- 人間の脳活動をコンピューターに例えると、自閉スペクトラム症では、3, 4のプログラムソフトの不調が目立つのです。3, 4が順調な自閉の方はいないと認識している程です。このプログラムソフトの動きに問題性がより一層あると、自閉としてはその分重度になるでしょう。心のない物体と心のある人を上手く区別し、自分の周囲を上手く理解して自分の位置を知ることで安心するのが、社会生活の中で自分を守りつつ生きる生命体の活動ですから。
- 5も、自閉スペクトラム症の約半数で不調と、経験的には認識しています。
- 6ですが、自閉ファンタジーという言葉があり、多数派に比較して、ファンタジーの世界に深く強く、長時間浸っている人(自閉スペクトラム症)がいると認識しています。これは実行機能を使っている活動のほうです。言葉を使って順序立てて、人の生き様や人の長期の人生、人のストーリーを、頭の中の空想世界に作るのでしょう。
- 7ですが、自閉スペクトラム症では、ファンタジーと現実が重なる(上手く切り分けられない)幼児期を持つ人が目立つと思います。自閉症者に比し多数派では、幼児期よりファンタジーと現実が明確に脳活動上で分かれていると思われます。
- 8ですが、母親なりが子を守ろうとする姿は、本能的なものだけでしょうか？ 子の将来を見据えて(想像して)の行動だろうと思われます。
- 8, 9は、現在の人間の「知」の広がりの意味します。これも想像力・創造力ですよね。

人の想像力を「脳システム論」で項目別に考えてみました。自閉スペクトラム症では2, 3, 4, 5, 7が苦手の方が多いようです。特に、3, 4のシステム不調が目立ち、その分「想像力がない」と表現されるでしょう。「自閉症の想像力の欠如」は、脳システム論ではこのようにまとめられると考えています。

B 広汎性発達障害とまとめた時代の文献よりの想像力のイメージ

著書「広汎性発達障害(栗田広 著 国立精神・神経センター 精神保健研究所 全国心身障害児福祉財団)」より以下の文を抜粋しました。これらも「自閉症の症状は、想像力の問題ととらえることができる」と思います。

- 社会性のある遊びをしない、仲間との友情を作り上げる能力の障害、無関心、クラスメイトとの

暗黙の前提の理解の欠如(例:クラスメイトに電話帳を説明してしまう人)

- ・言語および非言語的コミュニケーションおよび想像的活動の質的障害として以下。乳幼児では、「コミュニケーションの役割を持つ喃語、表情、ジェスチャー、模倣動作あるいは話し言葉などのコミュニケーション様式の欠如」

40年前くらいの、日本に「広汎性発達障害＝今でいう自閉スペクトラム症」が導入された頃の文章です。その時に言われた自閉症における「想像力の欠如」という言葉が、私には理解できていなかったと言えます。今回考えたり学んだ視点を持っていなかったと、今はそう思います。

C 著書「自閉症治療の到達点(太田昌考、永井洋子 編著 日本文化科学社)」

からみた想像力

以下の文章からは、表象機能が想像力を構成していることを理解できます。

① 表象機能ということばでいわれる想像力

- ・表象機能と認知機能によるステージ分けが、太田らによってなされている。表象機能とは、「人間は外界から入ってくる情報に対して、即、反応するわけではなく、頭の中で、その情報の意味を理解し、過去の経験と照合し、加工し、どのように自分がふるまおうかと計画する。表象機能の定義にはいろいろあるが、ここではこのような一連の機能を表象機能と呼ぶことにする。つまり、表象機能とは、心の世界ということになる。」
- ・「表象機能としての心の構成要素としては、認知と情緒・意欲(ここでは情意と呼んでおく)の二つの側面がある。昔から、精神機能を知情意と分けているが、認知とはその知にあたり、物を知ることであり、情意は情と意に相当し、物を感じる事、物事に対する意欲を指す。」
- ・「認知があると同時に、情意がある」「情意は知ろうとする意欲であるし、行動しようとするエネルギーである。これに対して、認知は何かに到達するための方向を示す能力である。何かをしたいという気持ちがあっても、認知による方向性がないと、行動はまとまらない。また、方向性があっても、認知による方向性がないと、行動はまとまらない。また、方向性があっても、やる意欲がなければ、その行動は達成できない。この二つは密接した分けがたい関係を保っており、このことは自閉症でも全く同様のことが言える。」

② 発達の節目・段階・レベルの話と想像力(図参照)

自閉症の想像力の欠如、非自閉症の想像力を考えるときに、その認知機能の発達や節目を考えることは意義があるでしょう。これは想像力の発展段階の開設と読み替えることができます。人の認知発達についてピアジェの理論を中心に、述べた内容を引用します。このことが理解されます。

無シンボル期

感覚運動的段階 この時期の知能は、直接実行による試行錯誤によるために、実効的知能期と呼ばれている。

知能の誕生 この時期に因果性の認識、物の永続性の獲得、手段と目的の分化が次々に急激に。「手段と目的の分化の節目」と呼べる。

この期に指差し行動が出て、無シンボル期は終わる。

シンボル表象期

遅延模倣、象徴遊び、描画、イメージおよび言語の出現で、この時期に入っていることを認識できる。

人生最大の発見一言葉があり、物には名前がある—「名前の発見の節目」。

前操作的(自己中心的)段階

前概念的思考期→「概念の形成の節目」→直感的思考期

小学校1, 2年生の具体的操作期

表象的思考段階

操作的段階 小学校2～3年から始まるとされる

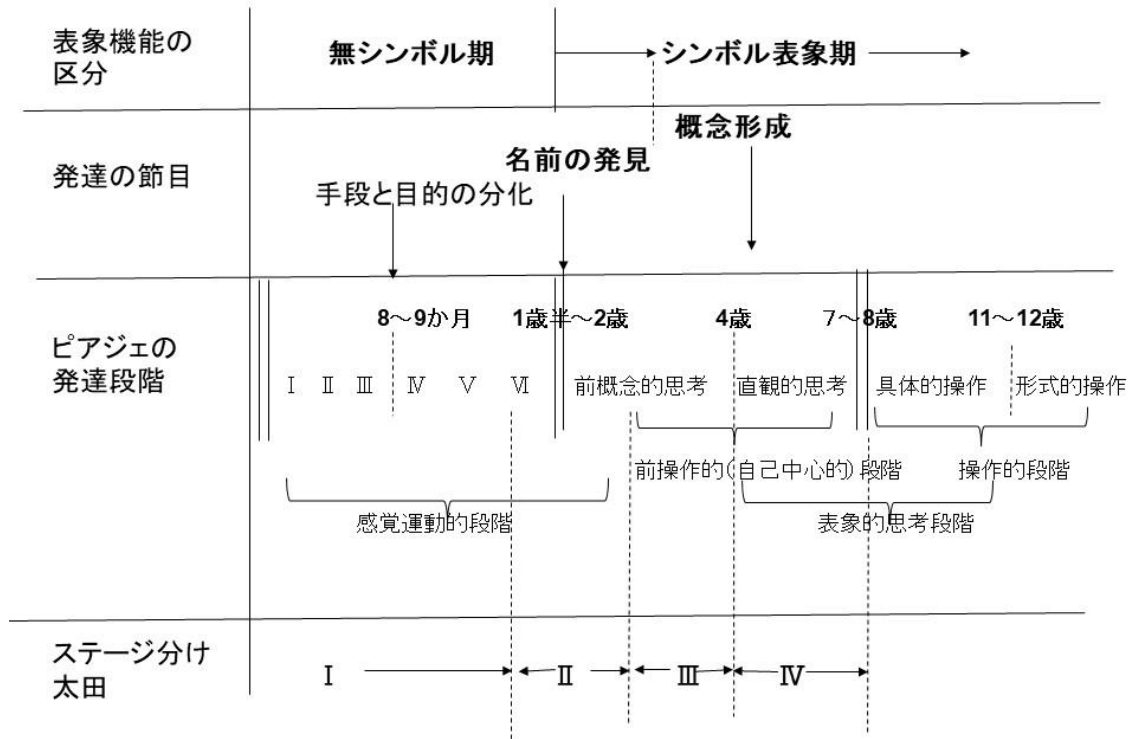
小学校の終わりころから、形式的操作期が始まり、思春期を通り、成年の思考として開花する。

「自閉症では、認知機能と情意機能ともに障害があると考えられている。」「両者の「発達水準に、並行性がある」と指摘されている。「シンボル機能に関する概念形成の能力は極めて発達が遅滞するが、機械的な記憶能力あるいは資格運動系の能力が孤立的に高いことがある」。

太田による自閉症の障害モデルとしては、原因—脳機能障害—表象機能障害—認知障害と情緒障害—環境との相互作用の中で自閉症独特の症状が出るのだろうとする。

以上は著書よりの抜粋である。想像力の不調は、各段階におけるシステム不調であることを意味していると解釈できる。これらは、自閉における「想像力の欠如」を構成する分野であると、大まかにまとめることは可能と理解した。

認知発達とステージ分け



D 「心の理論」観点よりみた想像力

「心の理論」は、人が集団で生きる上で必要な心の動きであり、想像力の主な問題と改めて感じます。「信念」という論点を問題にしていた文章を、①に引用します。また②に、道德についての文章を引用します。引用書籍は、「ビルガードの心理学(2012年 金剛出版 著者 Susan Nolen-Hoeksemaら)」です。これらも「想像力」を構成していると思われます。

① 心の理論の3つの段階(バーチ Bartsch とウェルマン Wellman,1995)

1,2歳頃 単純な欲求、情動、知識的経験に関する基礎的な概念を持つ。人々が欲しがったり怖れたり、また物をみたり、感じたりすることは理解する。しかし、他者が対象物だけでなく、自分自身の欲求や信念の両方を心的に表象することを理解しない。

2,3歳頃。欲求をはじめ信念や思考について話せるようになる。信念は正しいものもあれば誤ったものもあること、人それぞれの信念は異なることを理解できるようになる。しかし、依然として、自分自身の活動やほかの人の活動を、信念というよりむしろ欲求によって説明しようとする。

3,4歳頃。人の思考や信念は、その人の行動に影響を及ぼすこと、さらに人は現実を全く反映し

ない信念を持つこともあり得ることを理解し始める。

この他者の心の理解についての基本的要素は2歳よりも前に。例としては 大人の注意を方向付けるための1歳児の指差しの使用である。

②道徳的推理の段階 (Kohlberg. L 1969)

水準I前慣習的道德性 おおよそ10歳までの子ども

段階1 罰への志向(罰を避けるために規則に従う)

段階2 報酬への志向(報酬を練るために、相手からの好意を得るために、規則に従う)

水準II 慣習的道德性 10歳を過ぎたころから、他の人々の意見に照らしてその行動を評価し始める ~13歳まで

段階3 良い子への志向(他者から非難されないために規則に従う)

段階4 権威への志向(権威から非難されないために、また与えられた義務を遂行、しないことで罪の意識をもたないために、法律や社会的規則を支持する

水準III 後慣習的道德性 形式的操作の思考に到達したものだけが、行動が高次の倫理的原則に照らして評価されるという水準

段階5 社会的契約への志向(原理原則に従った行為は、一般に公共の福祉に融合するものとして受け入れられる。原理は仲間からの敬意、つまり自尊心を維持するために支持される

段階6 倫理的原理への志向(自ら選択した倫理的原則に従って行動する。それは大抵の場合、正義、気品、平等の価値を有する原理である。また自己否定を避けるためにその原理を支持する)(抽象的な倫理的原理を形成する必要があり、「自責の念に駆られるのを避けるため、それらの原理に敬意を払えるようになることが要求される」-この段階に到達する人は10%以下とのこと

以上の文章を引用・抜粋したが、これはこの分野での想像力の発展段階と読み替えることができる。

まとめ

自閉症における「想像力の欠如」という表現は誤解をまねきやすいと感じています。「想像力の不調」であり、この方が理解し易いでしょう。一方、質的な問題を表現するには、確かに「欠如」という言葉を使う意義があると感じます。

とりあえず「不調」を使うことにします。この「想像力の不調」に含まれることは、今回 ABCD と分けて記載してみると、多岐に渡ると理解しました。太田の使う表象機能、そして知情意の問題そのもの、脳活動の全体が、「想像力」といえるのでしょうか。

社会生活上で一番問題になる想像力の欠如・不調は、心の理論の不調であり、その延長としての10歳以降に育つ道徳的な感覚と言えるのかなと学びました。

以上。